

## カトリック香里教会 年間第十四主日 2021年7月4日

— エゼキエル2章2-5, マルコによる福音6章1-6 —

〔みなさん、わたしが〕思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

-二・コリント 12章-

### 弱さの中に働く神

神は真理の言葉で私たちを導いておられます。真理はすべて神のもので、人が真理を語っても、その人が偉いものではありません。誉は神に返されるべきものです。それは、神のものを自分に帰して称賛を浴び、人の上に立とうと望む傲慢です。傲慢によって人は、神を排し、人間の価値観を競って勝ち組に君臨し、世の無学な者、無力な者、身分の卑しい者とされた人、見下げられている人々を支配下において、彼らが生きられない世界を作っているのです。

一つ間違えば、パウロはこの過ちにおちいる側の人物でした。それゆえ彼には、思いあがらないための「一つのとげ」が与えられたのです。弱さの中に働くキリストの力をいただくために。彼は、自分が以前に福音を告げたコリントの共同体に、その後の様子を見に訪れた時、使徒と称して自分たちの教えで信者を支配下に置こうと、教会に混乱を引き起こしている偽使徒を見て、自分の深層心理の中に潜んでいた、あの危険な誤りから守られた体験を語るのです。「神は知恵ある者、力ある者に恥をかかせるため、世の無学な者、無力な者を選び、地位ある者を無力な者とするために、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれた。それは、だれ一人、神の前で誇ることはないようにするためであり、誇る者は主を誇れ」と。



パウロがこの戒めの先に見つめていたのは、福音宣教者としてのイエスの姿でした。イエスこそ、底辺の人、見下げられた大工の息子として選ばれ神から遣わされた、「弱さに働く神」の力なのです。小さな者の叫びには、大きな者が教えられる教訓があります。赤ちゃんの泣き声が然り。それは騒音ではなく、「命の発信」です。また、世界の「教会一致」のために選ばれた無名の啓示者「バスーラ・リデン」も然り。教会一致のために、神がこの無名の啓示者を選んだのは、宗教界（カトリック、プロテスタント、東方教会）のトップが、このような、つまらない小さな者に耳を傾ける謙遜さがなければ、実現は不可能であることを示しておられるのです。ですから、人類には「マリアの謙遜」が必要であり、誇る者は「主を誇らなければ」なりません。ちなみに、人から褒められたら、ほくそ笑むのではなく、すべて神に返してこう言うようにしましょう「神に感謝！」と。

2021年7月4日 主任司祭 昌川 信雄